

フランス人神父と戊辰戦争 — 「旅行記」 にみる会津 —

高野 延光

0 はじめに

「旅行記：函館から横浜まで」(VOYAGES De HAKODATÉ à YOCOHAMA (Japon)) は Jean-Marie Marin (マラン神父) によって執筆され、教皇庁が発行していた機関紙である Les Missions Catholiques (MC) に 1874 年 2 月 27 日から 9 月 18 日まで毎週掲載された。この旅行記は、戊辰戦争からしばらく経過した日本の東北地方各地の様子をよく描いている。

この記事は 1872 年春、マラン神父と 2 人の外国人の横浜から函館への船旅から始まる。函館から東北地方を徒歩や駕籠で南下し、秋田・仙台を経て新潟から会津に入り福島・白河・上州を経て、東京・横浜に 7 月の初めにまた戻る長い旅だった。この紀行文に東北各地の地理や自然、養蚕・絹産業、鉱山、人々の生活の様子や言葉、さらに戊辰戦争のことなど様々な事柄が描かれている。その内容は系統立てられているわけではなく断片的であるが、各地に残る戊辰戦争の跡には特に注意が向けられ、その様子とさらに戦争当時の状況が記されている。

この旅行記には写真を基にした 20 葉程度の挿絵 (エッチング) も含まれており、人物、建物、景色など様々な日本の風景が描かれている。後に述べるように、会津の人々や町の様子や落城前の鶴ヶ城の絵もあり貴重な資料といえる。(1)

この旅行記の特徴として、記録されていない日はほとんどなくわずかであっても出来事等が記載されていること、訪れた町や村、集落の人口、戸数等が几帳面に記録されていること、その日の出発や到着時間、訪問場所などが明確に示されていることが挙げられる。反面そこに住む人々とその生活の様子を描くというようなことは少ない。

本論ではマラン神父の事績を探り、旅行のあちこちで見た戊辰戦争の痕跡をどのように描き、この戦争をどう考えたのかそして会津への思いはどのようなものであったのかに焦点をあてたい。

1 著者マラン神父について

マラン神父の生涯については、総括的な伝記類は今のところ見当たらず、生育や受けた教育など不明な点が多い。パリ外国宣教会 (MEP: Société Missions Etrangères de Paris) に簡単な記録が残されており、それによると神父は 1842 年 9 月 7 日フランスのジブル (Gibles) に生まれている。この場所はフランス東部の田園地帯の中にある。そして MEP に入会后、1865 年に叙階され、翌 1866 年に来日した。1881 年には宣教会を辞し帰国、1921 年 5 月 21 日に死去、北西部のアントラン (Entrammes) というコミューンの墓地に葬られている。(1)

MEP は当時教皇庁から唯一日本布教を認められており、1862 年に横浜に天主堂 (通称フランス寺) を建て、1865 年 2 月には大浦天主堂の献堂式を行った。翌 3 月には大浦においてプテジャン神父がキリシタンを発見したと言う出来事があった。これは「キリシタンの復活」あるいは「使徒発見」と称され、奇跡的出来事としてヨーロッパで大きな話題になった。

その時帰国していたフェウレ神父は、マラン神父ともう一人の若い宣教師を伴い、再び来日することになった。フェウレ神父は 1855 年にジラル神父やプテジャン神父と共に沖縄に派遣され、その後ようやく横浜に上陸できた日本布教の先達の一人であり、若い神父たちの指導者でもあった。(2)

この宣教会は東アジアにおけるキリスト教布教を目的としていて、この時日本にいた宣教師たちの主要な役割は開港された居留地におけるカトリック教徒の司牧であった。そしてもしキリシタンの子孫が残っているならば、その発見も任務の一つではあった。期待通りに日本人使徒は発見されたが、長崎では1867年の浦上四番崩れなどに代表されるような激しい迫害が続いて、プティジャン神父は秘密裏に日本人信者の司牧に当たっていた。

マラン神父の日本における事績は断片的にしか知られていないが、以下記しておきたい。

来日後、まだ経験の浅いマラン神父はフェウレ神父の補佐をしていた。フェウレ神父は横須賀でフランスだけでなく他国のカトリック教徒の司牧に勤め、同時に東京と横浜の布教所の司祭も兼ねていて多忙であった。(3)

1867年末にジラル神父が没し、その後任としてマラン神父が横浜の外国人に対する司牧を行うようになり、さらにイギリス軍隊付の司祭にも任命された。彼は英語も堪能であった。(4)しかし、次第に日本人に関与することを望むようになってきた。それは日本の生活にも慣れ、潜伏キリシタンも多く存在し、宣教師の人数も増えてきたことによるだろう。しばらく後のこの東北旅行も潜伏キリシタンの発見という隠れた目的があったものと考えられる。(5)

1868年末には函館戦争が勃発した。その当時函館にはエヴラールとアルムブリュステルという神父がいて、マラン神父が「旅行記」の中で詳しく述べている戦いの内容は彼らが報告したものであった。箱館戦争に限らず日本の様々な状況を宣教師たちは互いに知らせ合っていた。(6)

1869年には天皇が京都を離れ江戸に入る際に、その行列を自ら見学に行っている。この時実際に天皇の姿を見ることはなかったが激動の変化を神父は肌で感じ取っていた。(7)

1871年秋頃ミドン神父と共に横浜から東京に派遣され宣教を始め、翌年千代田区三番町に神学校(ラテン語学校)を開いた。これが東京で初めてのキリスト教の学校といわれている。(8)

1872年夏の初め東北の旅に出かけた。翌1873年パリ外国宣教会が招致した女子修道会が孤児院と学校を設立し、マラン神父はこの中等学校の校長になり英語を教えている。(9)さらに翌年に神父は南部藩でのキリシタンなどについて報告している。(10)

1875年築地の居留地に仮の礼拝堂と宣教師館が建てられた。日本人の信者の団体が作られて、神父は8月に30人ほどに洗礼を施し、前年の8月には沼津近くの集落でもほぼ同数の人数に洗礼をしたことが知られている。この集落は横浜から自由な旅行が認めている10里圏内にあって、秘密裏に布教をしていた。(11)こうした集団での洗礼は今後の信仰を維持し指導者を育てるという重要な意味を持っていた。

1876年7月30日マラン神父は函館に教会の礎石を建てている。その時フランス軍の2隻の軍艦が招待され、楽団が音楽を演奏し盛大に式が行われて近隣の日本人も大勢見にきていたと喜びを示している。(12)また簡潔であるが、「函館では、マラン神父は100件以上の洗礼を記録するという喜びに恵まれました。」という記録もある。(13)そして、翌年には現在函館カトリック元町教会の初代である木造の聖堂が建設されフェウレ神父の希望を叶えた。

1878年パリ外国宣教会の招致により来日した修道会は函館で2ヶ月も経たないうちに、孤児院を設立し孤児を受け入れた。マラン神父がその土地の管理しており、資金さえあれば2,000人の孤児を収容できるだろうとも言ったと記されている。この活動はマラン神父の尽力によるものであった。(14)しかし、翌年には函館で大火事があり、市街の重要な建物は消失し教会だけがかろうじて残り、避難所となったようだ。

1880年健康状態がすぐれず宣教師の仕事ができなくなったと報告されている。(15)しかしそこには後に述べるように宗教と国家という極めて複雑で深刻な政治的事情があった。

2 旅行の同行者

「旅行記」の掲載を始める前のMC1874年2月6日号で、共に旅行をした官員のひとりがその後改宗した様子を詳しく知らせている。この記事の欄外には「次の号でマラン神父の旅行を掲載します。」と短い予告が出されている。この同行者についてはまず以下のように説明している。「昨年、私がデンマーク総領事とともに行った日本の北部を巡る旅では、護衛のために身分の低い3人の現地の官員がいた。彼らの中に、こんなにも早く天国に行く定めのある魂がいるとは全く思わなかった。護衛長は、まさに私が話している護衛なのだが、私が誰なのかまったく知らなかった。その後、彼はいくつか興味を引くことがあると私に言った。まず第一に、私たちの振る舞いが、彼が知っていたヨーロッパ人とはあまりにも違っていったことだった。」(1)

この記事によると、旅行はデンマーク総領事(consul général de Danemark)が主催者でその弟も全行程を共にしている。その他に3名の階級の低い日本人官員 (trois officiers indigènes, d'un rang inférieur) がいたということである。当時各国の領事は他国と兼務していたり、また貿易商を任命したりすることがあった。そしてフランとの条約により外交官と総領事は国内を自由に動くことができたが、それ以外は自由な旅行は認められていなかった。今回の旅行ではマラン神父は領事の通訳という名目で認められたのではないかと推測できるが、弟の立場を含めその説明は見当たらない。彼らには明治政府から通行証が発行されていたと思われるがそれにも言及していない。

外務省からの3人の官員はここでは「護衛官」(escorte)と記してある。外国人の国内旅行に同行し、安全確保のためとしながら実際は監視役であったと考えられる。(2)しかし実際にこの旅行は危険なことや重大な問題が起こったことなどは全く描かれておらず、「護衛官」は彼らの身の周りの世話をし、大いに役に立ったことが記されている。

マラン神父が旅行記の掲載前のこの記事で伝えたかったことは、この護衛長が旅行後の1873年5月に家族を含め受洗したこと、そしてその後信仰を表明しながら亡くなった時の出来事に関することである。これについては後述する。

デンマーク総領事については、その弟とともに函館から秋田に向かう途中の5月9日に詳しく紹介されている。それによると旅行団の団長であるこの領事はエドワルド・バヴィエル(Edouard de Bavier)という30歳のスイス人であった。彼は日本国内旅行がすでに4回目で、健脚家であり自然が好きな人物であった。マラン神父の旅行費用も彼が負担した。同行した弟のエルネスト・バヴィエル(Ernest de Bavier)は4歳年下で、兄と同様に素晴らしい人格であるとしている。日本の護衛官は荷物の運搬や馬の手配、通過予定の村々に予め連絡を入れてくれ、その他に4人の使用人を雇い合計10名の旅行団で、神父たちは歩いて食べて寝ること以外に心配することはなく、快適な旅を楽しんだと記されている。(3)

マラン神父はこの旅行記の中で領事であるエドワルドは貿易商であること、またエルネストも養蚕や製糸産業全般に造詣が深いことなどについては一切触れていない。ただ旅の終わり近くなり養蚕の盛んな福島から上州に至ると、後に論ずるように読者は兄弟の旅の目的はこうした産業の調査であったことに気づく。エドワルドは当時日本でも大きな会社を経営し、旅行での彼の興味の中心は弟と同じように主に絹産業にあったと言える。(4)

エルネストには日本の養蚕・製糸、絹織物についての著作があり、彼は日本中を巡り当時の日本の輸出の主力であったこの産業について徹底的に調査を行なっていることがわかる。この著作の中で例えば、桑の種類、蚕の種類、育て方、道具、産地そして、絹製品について日本の各地域における生産量や品質など広範囲に高度な専門的知識をもって緻密に分析している。(5) この旅行記の中でも、訪問した小さな集落でさえもその人口が記載されていることは、兄弟が調査した情報をマラン神父も共有していたのではないかと思われる。このエルネストの著作の中にはマラン神父の名前はないものの欄外でこの旅について触れている。(6) 一方、神父が兄弟の養蚕等の調査内容自体についてこの旅行記で言及しているところはない。

バヴィエル兄弟はこの東北旅行で兄の領事としての特権を生かし日本の重要な産業の1つである銀や銅の鉱山も訪れている。後述する明治七年に新潟から東京に向かったフランス人医師ヴィダールが会津までの道中多くの鉱山を訪れ鉱石などを調査している事を見ると、当時日本の天然資源は注目されていたことが理解できる。マラン神父自身もこうした日本の鉱山にも何箇所か言及しているが、もともと関心があったわけではなく、旅をしている中で兄弟に影響され徐々に興味を持って来たという印象を受ける。(7)

3 『旅行記』の中の会津

3-1 横浜から函館まで

1872年4月29日、マラン神父一行は夕方横浜からアメリカの汽船ニューヨーク号で函館に向けて出発した。水戸沖で、水戸藩の一橋家から最後の将軍(Chogoun)を輩出したことから始まり、さらに日本の維新の政治的状況について説明している。水戸藩の人々については「住民は最後の将軍に共感し、最近の革新を西洋の野蛮人(*barbares d'Occident*)のせいにし激しい、憎悪を誓った。」(1)と述べ、また「1868年南の有力な封建領主たちは反乱の旗を上げ、一橋[問題の子孫の名前]の軍隊を打ち破り一橋を帝国から追放した。」と国内の激しい対立と混乱を述べている。(2)

しかし、神父は反乱軍が形だけの天皇を立てて日本を動かして行こうとする無名の野心家たち(*les ambitieux*)であったと捉えている。さらに「一橋家の没落の後反逆者と重罪人として勝利した諸侯(*princes*)は、野心家にとって極めて従順なお飾り(*fétiche*)である天皇(*Mikado*)を祖先であると言われている神々(*des Camis ou des dieux*)の座に座らせた。1868年2月8日以来この古来からの神は君臨しているが統治はしていない。したがって、彼は真の立憲君王である。しかしながら彼は議会を持っていない。彼の名のもとに数人の無名の野心家が政府の歯車を動かしている。」(3)と述べ、「野心家」という言葉を繰り返し用い新政府の政治家を批判している。

このようにマラン神父は旅行記の冒頭で、激動時の日本の大きな動静を読者に説明している。そして新政府の指導者に対しては身元もよくわからない人々であり、天皇は政治的機能を有していない存在であると強く訴えている。

航海3日目の夜、蝦夷の島が見え函館に着き、そこで働く神父たちとの再会を喜び、しばらく逗留することになった。神父は函館の地理を説明して、榎本軍が立て籠もった亀田要塞(五稜郭)はまだ無傷で残っており、「一方要塞の内部は瓦礫の山である。家屋の残骸や点在する2, 3の小さな兵舎が地面を覆い、かつて軍隊がこの城壁の中で野営していたことをまた示している。」と、戦争の残骸をまだ見ることができたと記している。(4)

さらに、この函館戦争の顛末について詳細に示し、結局は「18ヶ月近くの間、この戦いは江戸から松前、函館までの北部の国々に及ぶ惨禍をもたらした。そして榎本軍の敗北はこの混乱の終わりであった。」と締め括っている。(5) 神父の函館戦争に関する知識は驚くべき事であるが、前述のようにこの時函館にいたエヴラル神父の報告によって宣教師達が共有していたことであつた。

マラン神父は最後に函館の人々は自分たちを人喰い人種(anthropophages)と見ているようだとか、後にわかったが南部や秋田など東北の人々は愛想よく礼儀ただしいだとか、人々の様子も記している。さらに、ニューヨーク号で共に函館やってきた新長官黒田清隆はキリスト教の迫害を始めたと信仰の話題にも及んでいる。この新政府軍の重要人物について、最後に少しだけ書き加えているのはまだ行われていた迫害の問題を含め、新政府軍に関して好ましくない思いを持っていることの表れであると理解することができる。

3-2 函館から新潟まで

5月9日に函館を出発して、旧南部藩を通り26日には秋田に着いた。その間毎日多くのことを記録しているが、そのほとんどは深刻なものではなく、雪解けの若葉や美しい花、そして雄大な景色など自然の美しさそして明るい女性の話し声、漁業に従事する善良そうな人々など穏やかな様子を丁寧に描いている。横浜という小さな村から野辺地へ進み、七戸まで行った時には、疲れて途中で馬を借りたり、駕籠に乗ったりしている。そして江戸時代の参勤交代や街道について言及し、宿泊場所として多くは本陣が用意されていたと記している。これは護衛がその場所ごとに事前に連絡をとり設定されたものであるとしている。彼らのおかげで以前には大名が宿泊したような場所で夜を過ごすことができたことと喜んでいる。(1)大名がいなくなった時代でもそれまでに発達した宿駅制度の機能を利用し、神父たちの荷物の輸送についても円滑に行われていたようだ。領事一行ということもあり、かなり厚遇され快適な旅をしていたと思われ、食べ物や宿の不満も訴えていない。

この途中で大山弥三郎という写真屋を雇うことにしたが、彼は写真技術を教えてもらったのはマラン神父の友人だと知りとても驚いていたと記している。旅行を通して70~80枚の写真を撮ったとしているが、MCに掲載されているのは20枚程度なのでその他にもかなりの数の貴重な写真があるはずである。不確実だが前述のエルネストの著作に使用されていると推測できる。

旅の全体を通してキリスト教についての言及は少ないが、ここで禁教に関する高札に触れている。彼は禁教令がまだ撤廃されていないことを嘆き、こうした高札は秋田、羽前、会津、新潟などでも見かけたとも付け加えている。(2) キリスト教禁政策が終わるのは翌年の2月になる。

5月26日には、秋田に入る前に日本で起こった大きな政治的変革(grands changements politiques)、つまり明治維新について詳しく説明をしている。その中で、封建制度は廃止されそれぞれの国にあった城下はさびれてしまったこと、江戸は東京となり、天皇の地位は失墜して人々は尊敬の念を失っていることなどを述べ、さらに元大名たちの藩は没収され「県」となり、その行政は「県令」(préfets)が行っていて政治体制が大きく変化したと述べている。しかし、ここでも、「行政の指揮は江戸に集中され、大臣たちの手に委ねられた。彼らは秘密の影響力を持つ者(influences secrètes)に従っているように見える。」と黒幕の存在を疑い、天皇もまた「野心家が悪用する一種のお飾りである。」と再び述べ、この野心家たちが政権を取って代わったとここでも厳しく新政府を批判している。(3)

市ホームページ上での作品公開はここまでです。

全編をご覧になりたい場合は、会津図書館や歴史資料センターまなべこでの作品公開をご利用ください。

◆会津図書館

〒965-0871

福島県会津若松市栄町3番50号

生涯学習総合センター（會津稽古堂）2F

◆歴史資料センターまなべこ

〒965-0807

福島県会津若松市城東町2番3号